



ドバラダ門

山下洋輔



新潮社



ドバラダ^{もん}門

山下^{やました}洋輔^{ようすけ}

発行——1990年8月25日

2刷——1990年9月25日

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

〒162/東京都新宿区矢来町71/振替 東京4-808

電話——業務部 03・266・5111

編集部 03・266・5411

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。

©Yosuke Yamashita 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-343703-0 C0093

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお替えいたします。

ド
バ
ラ
ダ
門

表紙写真
装幀

山藤章二
増田彰久

プロローグ

門があった。

石造りの大きな門だ。

正面のアーチには鉄格子で出来た両開きの扉がはめ込まれていた。両端には八角形の塔がそびえ立っていた。西洋の中世の城が連想される姿形だった。しかし、これが造られた時には西洋は人々にとってまだ遠い夢の彼方にあった。遥かな時間と空間を越えてこの建造物はいきなりここ、鹿兒島の甲突川（カサヅカガハ）のほとりに出現したのだ。

石の門はその日の光によって様々に色を変えた。白く見える夏の日もあれば黒く見える冬の日もあった。雨の日に薄紫に塗られることもあり新緑を映して黄緑に輝くこともあった。夜中には雷光を背景にオレンジ色に燃え上がったりもした。別の夜には満月に浮かぶ八角塔の周囲を五千匹のコウモリが飛び交った。

石の表面は妙に触り心地がよさそうだった。手を触れたいと思う者もいた。だがそうする者は滅多にいなかった。門は別の世界から連れて来られた異形の獣のようにどことなく居心地が悪そうにそこにくずくまり続けていた。

その中には選ばれた者しか入れなかった。ときどき人々は入って行く者たちを見ることがある。甲突川にかかるこれも石造りの鶴尾橋を二頭立ての馬車がゆっくりと渡って行く。門前の広場



に馬車が止まると、御者がラッパを吹き鳴らす。

「ぺえええええ、ぺええ、うびしゃばどびや」

すると、石のアーチの中の大きな鉄格子の扉がギリギリと左右に開き、馬車が石の門をくぐって中に入って行くのだ。のんびりとした光景だった。しかし、これを平穏な気持ちで眺めている者はいない。中に入れなくても建物に触れられなくても人々には分かっていた。この異形の物の存在する目的は一度聞けば誰もが瞬時に理解した。

その遙かな別の世界の文明の姿を映している大きな石の門は、この国の監獄の門だったからだ。

しゃばどびうびしゃばどび、と水の流れる音が絶え間ない。

「啓次郎、何をしているのですか。早くいらっしゃい」

寿賀^{すが}の低い声が闇に響いた。

「母上、待つて下さい。私はその、そちらではなくこちらの方に」

「何を言っているのです。この一刻を争う時に」

「啓次郎、どうしたのだ。早く来い」

母と兄が呼びかけた。姉と妹たちが心配そうに見守っていた。しかし、その子供には聞こえないようだった。西田橋を渡ると皆を追って下流に向わずに上流へと歩いていった。

「馬鹿、啓次郎。どこへ行くのだ」兄の雄熊^{ゆうくま}があとを追った。いつもは聞き分けのよい弟がこの時は違っていた。兄の手をふり払うようにして歩いて行く。目的地に着くまでは他のもの一切が目に入らないようだった。目的地。しかし、これから甲突川を下り鹿兒島灣に出て急いでこの国を脱出する以外に、今、この家族がしなければならぬことはない。

「啓次郎、どうしたのだ」みたび雄熊が声をかけた。すでに啓次郎は走りだしていた。みるみる

内に闇にまぎれていく弟の姿を雄熊は追った。普段ならすぐに追いつく筈の弟との距離が少しも縮まらないのを雄熊は不思議に思った。弟はまるで物の怪モノノケにつかれたように走っていた。宙を飛ばかのようにだった。よく見ると本当に宙を飛んでいた。

啓次郎はようやく走るのをやめた。なぜここまで来たのかその理由は自分でも分からない。だがここが目的地だった。啓次郎が立っているのは永吉村という所だった。西田橋から上流に一・五キロ。折から照らしはじめた月の光に浮かび上がるのは一面の水田とその彼方の低い山並だけだった。目の前を流れる甲突川越しに啓次郎はこの景色に心を奪われていた。なぜ自分はここに来たのだろう。その答えを啓次郎は求めた。啓次郎は目をこらした。すると答えが与えられた。

何も無い筈の対岸に巨大な物の姿がぼんやりと浮かび上がった。それが何であるか一瞬の内に啓次郎は理解した。しかし次の瞬間その物の姿は消え、啓次郎は自分が何を見たのか忘れた。

「啓次郎、大丈夫か」ようやく兄が追いついた時、啓次郎はまだ呆然ぼうぜんと立ちすくんだままだった。雄熊は弟の両肩に手をかけてゆさぶった。

「兄上」対岸の一点に心を奪われながら、低い静かな声で啓次郎は言った。

「私は必ずまた鹿児島に帰ってまいります」

「啓次郎、まだ分からないのか。もう我々にはここには住めないのだ。近々戦いくさは避けられないという父上のお知らせがあった。その戦に勝とうと負けようと同じだ。どちらにしても我々はもう鹿児島には帰れない」

「いえ、そのような意味ではなく、その、私は必ずここに、つまりこの場所に、その川の向こうに、何かその妙な物があって、それがこの私と関係があるのです」

「何をわけの分からぬことを言っているのだ。ここには何もないではないか」

「いえ、それがその、今はありませんが必ずあるようになるのです。何かその、胸のつぶれるよ

うな気持ちになる物がここに出現します。それはもう何と言ってよいか、それはもうそれはもう

「よし分かった、啓次郎。お前はきっと神がかりとなつて未来の姿を見たのだろう。何を見たのだ。何というものだ」

「それが私の言葉にはないもので、ええと、ぷりざんとかぼりぞんとかいう音が頭には響いてまいります」

「なに、それは一体どういう意味なのだ」

「よく分かりません。そこに入らなければならぬ者がおります。中には、べすとせらあというようなものをいたす者もおります。その者たちは皆そこに一緒にいて、なぜかと言うとその、いやそんな馬鹿な、これではまるで、それをなぜ私が」

「どうした啓次郎。しつかりしろ」

「ああ、もう何が何だか分かりません」啓次郎は白目をむいて両手を左右に広げ、そのまま失神しかかった。「おーまいごつど。ほわつつふあつきんまたーはぶにんぐひや」

「しつかりしろ。さてはキシタン伴天連テンレンの物の怪につかれたか」

失神した啓次郎を雄熊が背負ったところに母親と娘たちがようやく追いついて来た。

「大丈夫ですか」

「大丈夫です、母上。さあまいりましょう」母と兄と姉と二人の妹と共に、兄の背に背負われた啓次郎は甲突川を下りはじめた。やがて月が再び雲に隠れ、一家六人の姿は闇に溶けていった。

第一章

鹿児島に行くなら是非そこにある刑務所にも行ってこいと母親に言われたら誰だってびっくりする。新年早々鹿児島のジャズフェスティバルに呼ばれているという話を実家でしていた時だった。

「なに、刑務所だって」藪^{やぶ}から棒とはこのことだ。

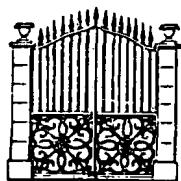
行けと言うなら行くが、あいにくおれにはまだ入る資格がない。誰か知り合いが入っているのか。差入れか。何を差し入れるのだ。どうやって面会して、何を言えばよいのだ。パンの中にヤスリを隠して渡すのか。それともピストルか。あいにくおれは安部議二じゃないから、これ以上思いつかない。何なんだ。すると母親はそういうことではなくて問題はその刑務所の建物なのだと言った。

「それはあなた、綺麗で立派なものだっというわよ」

刑務所が綺麗で立派だという言い草もよく分からなかった。そんなものをなぜおれがわざわざ見に行かなければならないのだ。そう聞くと母親は当然という態度でこう言った。

「だって、あれを造ったのは、あなたのおじいさんなんですからね」
「え」

青天の霹靂^{へきれき}とはこのことだ。



こうして「山下のおじいさん」という者が刑務所と共に歴史の霞かすみの中から姿を現わした。

このじいさんは、おれの知るところによれば確か山下啓次郎という名前だった。フザケた名前だと思ふ奴はチャنجイ年齢だ。かつてのロカビリースターと同発音であつてあの頃にはこの家でも苦笑と共にそのことは取り沙汰さたされた。しかし、こちらのケイジロウは折角のその印象的な名前のわりには何をしたのかよく分からない人だった。鹿兒島の出身だということとははつきりしていたが明治政府の役人だったとも聞かされたし警視庁に勤めていたともいわれた。じゃあオマワリなのかというところでそうではなく、実は建築家だったらしいなどと言を左右にしてどこかあいまいな存在だったのだ。

父親の啓輔は啓次郎の次男であと取りとなつてゐるのだが、この人も自分の父親が実際に何をしていたのかよく知らなかった。

これはしかし納得できないことでもない。自分の仕事のことを家族に詳しく話して聞かせるということを明治の人間はしなかったかもしれないし、父子の年も離れていた。そして何よりも考えられるのは多分に薩摩さつまの氣質きしつと関連した家風だ。つまり、この家では父親と息子があまりべらべらと喋しゃべりあうことがない。もしかしたら、生涯に一定時間以上話をしてはいけないという掟おきてがあるのかもしれない。たとえばおれの場合でも四十近くなるまでに父親と交わした会話の所要時間は全部で一時間以内だろう。それもあちらのお言葉はすべて「馬鹿」と「やめろ」という二つに限られていた。こういうわけだから父親が祖父のしたことをよく知らなかったとしても当然なのだ。

それをなぜ母親が今言い出したかというのと、次のような背景があつた。

啓次郎の三女美代子の夫、小泉清春おじは自身も建築家だった。しかも、鹿兒島第七高等学校

出身という因縁があった。結婚した時にはすでに義父啓次郎は死んでいたが、建築家だったということは知っていた筈だ。しかし、実際に何をやったかよく分からなかったのは家族同様だったところが、近年になって、大変熱心にそのことを調べ始めた。清春おじが第七高校に学んでいたときには、数キロ離れた甲突川の上流にはすでに石造りの不思議な建物が立っていた。それは地元でもずっと外国人が造った物だと思われていた。現に他にも鹿児島には多分外国人が建てたのだらうと言われる石造りの建造物がいくつもある。

あれを建てたのもしかしたら義父かもしれない、というアイディアがどのようなにして清春おじの頭に生じてきたのか、詳しいことはよく分からない。あるいは、妻の実家のものろものろの言い伝えを同業者の専門的立場から裏付けようとしたということかもしれない。勿論そこには、自身学んだ鹿児島という土地や身内の同業者の因縁がからんだ情熱があったに違いない。晩年、調査のため何度も鹿児島に足を運び知人に会っていたといわれる。そして、その調査の結果はどうやら有罪、じゃなかった本当と出た。そのことがしばらく前のやはり正月の集りで披露された。しかし、その結果親戚一同大喜びし赤飯を炊いて盆踊りを踊ったかというと必ずしもそうではなかった。

「やはりそうだったか」

「警視庁に勤めていたというのはそういうことだったのか」

ここにおいて、役人と警視庁と建築家がすべてなんの矛盾もなく合体したのだ。事実をはっきりした。が、モノがなにしろモノだ。このあと子孫たちがどういふ会話を続けられよいか知っている人は教えてもらいたい。

勿論、清春おじにはこの建物の大変な歴史的価値が理解できた。そのことを皆と共に喜びたかったに違いない。しかし、普通の人々であり普通の市民生活をまっとうしている身内たちにとっては、そのような専門的歴史的価値を愛でるよりも前にまず「困った」という気持ちが生

立つたことは充分考えられる。

「なぜ、迎賓館ではなかったのか」

「なぜ、鹿鳴館ではなかったのか」

「折角、明治時代に建築家というエライものになれていたのに」

「せめて、築地ホテル館だったら」

「いやいや、ぜいたくは言わない。東京駅丸ノ内口でよい」

「なぜに、世間様に胸を張って申し上げることのできるものをつくらなかったのか」

「よりによって、か、監獄とは」

「こともあろうに、ろ、牢屋を」

「子孫の迷惑が分からぬか」

「じじい、そこへ直れ」

無念の叫びが皆の胸の中に響き渡っただろう。そして一同は、避けがたい宿命に直面したときにこの一族に特有の殺気立った笑顔となりつつ、全員で眼前の中空の一点を凝視し続けたにちがいがなかった。

その遺跡を見て来いと言っているこの母親は嫁に来る前はいわゆる大正のハイカラ家庭のお嬢さんだった。むしろおてんば娘と言った方が正確だった。YWCAのバレーボールチームに入ってフィリピンチームと戦ったり職業野球ができる前から六大学野球に通って宮武、山下、三原、水原などと言って騒いでいた。だから嫁ぎ先の宿命もなんのその、あくまでも物事をポジティブにとらえるのだ。この時も夫の父親が何かしら面白いものを作ったという一点で受けていた。非常な興味を示し自分の代わりには是非見て来いと推めるのだった。

「それはあなた、大変なものなのよ」何が大変なのかさっぱり分からない。さらに、明るい人間が大抵そうであるように同人も夫の無口を補って余りある弁舌の才能を有していて、この日も話は刑務所からおじいさんへおじいさんからおじゅうとめさんへさらにこの家の奇妙な風習にもめげず自分がいかにつくしたかの話から実家の娘時代のハイカラ生活の話へとほとんど句読点無しになだれ込んだ。遂には昔英語でやったというシェイクスピア劇の話となつて得意のセリフを披露しはじめた。

「イフ・バイ・ユア・アート・マイ・ディアレスト・フアーザー」両手を広げて目をむいた。
「ユー・ハブ・プット・ザ・ワイルド・ウオーターズ・イン・デイス・ローア・アレイ・ゼム」
「分かった分かった。その建物を見て来る。人に聞いてみるよ」

こうして、じいさんとその建物への探索旅が始まった。これが思いもかけぬ展開となつて行くとはその時は知るよしもない。しかし、やがて出合う石の門は、好奇心からそれに触った類人猿が、最後にはひどい目にあつた「2001年宇宙の旅」に出てくるモノリスのような魔力を現わした。言葉でしか知らなかつた「明治維新」などというものに巻き込まれた。戊辰戦争は起きるわ、西南戦争は起きるわ、欧米八カ国三十カ所の監獄視察などという面妖なものが行なわれたことが分かるわ、遂には監獄の門前にランドピアノを持ち出して弾くわ、古代隼人が門柱に座り込んで遠吠えをするわ、時空を越えてありとあらゆるところにこの身が飛ばされていくことになるのだ。

たとえばその一例は、今手元にあるひと組みの設計図だった。これが何かといえど何処であろうかの独逸国の旧首都柏林にあるというブレッツェンゼー監獄のものなかつた。常識的に考えて当然門外不出絶対秘密の筈の監獄の設計図がこともあろうに日本人バンドマンの手に渡るとはど

ういうことだとわれながら心配になる。これも犯人じゃなかったこのじいさんの足どりを追う内にこういうことになってしまった。世間の疑惑の眼差しにもめげずにこの成果を達成してくれたドイツ人マネジャーの行状などにもいづれ触れることができるだろう。

この設計図を真つ先に見てもらいたかったのは無論前出の清春おじの筈だった。しかし残念なことにおじはあの石の門についてのそれまでの調査を親戚一同への最後の贈物としたかのように他日亡くなって行った。一足早くあちらの世界で義父と初対面し、石の門について様々の会話を交しているにちがいない。

このような背景のもとに、その年（一九八六）の正月に鹿児島にやって来た。ご先祖の地である薩摩には何度か来たことがあるが、今回は何事かの密使命を帯びてやって来たという感じが否応なしにする。ジャズフェスティバルの前日の打合せを兼ねた夕食会の席上でそういう話題をどのように切り出したらよいのか分かる人は教えてほしいが、ま、機を見て話してみただった。

「ここには、古い刑務所がありますね」

「あります」

「あれを建てたのが、家のじいさんだという話があるんですが」

大変に悪いことをした身内のことを話すときに誰でもそうなるに違いない低めの音程とならざるを得なかった。

「え、本当ですか」

世話役の南日本新聞社の馬場さんと、鹿児島テレビの有村さんが顔を見合わせた。やはり悪い奴の子孫と思われるのかと覚悟したが必ずしもそういうことだけではなかった。ちょうど今その刑務所が問題のさ中にあつたのだ。

移転問題が持ち上がっているという。現在それはまだ「使用中」だが、何ぶんにも建てられた時と違ってその場所がほとんど市街地になってきている。そのど真中にこういうものがあつては色々好ましくない。大変広い場所を占めているし夜な夜な拷問される囚人たちの叫び声が街中にこだまして、いやいやそんなことはないが、まあとにかく早めによそへお引取願おうという計画が着々と進行中らしいのだ。そのような時に身内が名乗り出たということであつて、ジャーナリストである両氏はこの成行きにやや感興をそそられたようだった。

「我々もまだ実際に見たことはないのですが」

「ちよいどいい機会だから、御案内しましょう」

「明日の昼間にお迎えに行きます」

有難くお願いをしてその日は休んだ。

ところが、翌朝目を覚ますと思ひもよらぬ天変地異が起きていた。夜の間大雪が降つたのだ。ホテルの窓から見える景色はすべて真っ白となつた。頭上に迫るように屹立きりぎりすしている桜島も真っ白に雪をかぶりまるで北極海に浮ぶ火山島というような不思議な光景となつた。この南国に珍しい五十年ぶりという大雪だつたのだ。すぐ近くのコンサート会場に行くのさえ吹雪の八甲田山かヒマラヤの雪男探索隊という有様だつた。交通は麻痺しタクシーも姿が見えなくなつた。

「どうしますか」という有村さんの電話に「今日はよししましょう」と言うしかなかった。無理をすれば門のところまで行けたかも知れないが、この時にはどうしても今行かねばという気持ちにはなつていなかった。親に言われた親戚の用事でそれもあまり世間態のよいものではないことをいやいや果たすという位の気持ちだつたのだ。しかし、今考えるとどうもこのあたりから門の不思議な力が作用し始めていたに違いない。様々のメッセージをこの大雪の中に読み取ることが可能だつた。

「わしに会いに来るのはまだまだ早過ぎる」とじいさんは言っていたのかもしれない。「本当に来たければ雪の中を這^はってでも来い。サツマアザラシと化して甲突川を渡って来い」ということだったのかもしれない。そして後になるとこの大雪によって門が知らせようとしたことがさらにはっきりと思い当たった。

西南戦争だ。

その日全西郷軍が伊敷村に集結した頃から降り始めた雪はそのまま降り続いてこの国ではまれに見る大雪となっていたという。

大雪と共に始まることになる西南戦争の予感の中でその前年に啓次郎は甲突川の西沿い、西田橋のたもと西田村を出て上京したのだ。九歳だった。命がけの脱出行だったかもしれない。そういう事情があった。家族と共に西田橋を渡る時にそのさらに上流一・五キロの永吉という場所に三十年後に自分が大きな不思議な石の門を建てることになるということを一瞬でもその少年は予感したのだろうか。

いや、少し先を急ぎすぎた。そのようなことを知るはずと先のことだ。

その時は、ただただ呆然と雪を眺め、その建物よりもその晩の自分の演奏のことを気にかけていたのだった。

こうして、門との最初の対面はお流れとなった。

東京に帰ってしばらくすると、鹿児島テレビの有村さんから写真と手紙が届いた。

初めて見る門の姿だった。大きさがよく分からなかった。人の背丈くらいにも見え、はるかに巨大な大城壁にも見えた。撮られた時期が夏だったのか回りに草花が生い茂っているようなアングルだった。西洋庭園の裏門のようでもあった。これなら黙っていれば牢屋の建物だとは気づか